

井上靖「洪水」論

典拠の再検討と屯田の意味

劉 東波

はじめに

井上靖の「洪水」は、昭和三四年（一九五九）七月に『聲』第四号に発表された短篇歴史小説である。後に短篇集『洪水』（新潮社、昭和三七・四）に収録された。

本作品の典拠や主題などを論じる資料は三種類に分けられる。まずは、本作が発表された後の昭和期に発表された論考である。次は、近年発表された最新研究であり、劉淙淙氏（井上靖研究―西域小説から「孔子」へ―皇學館大学博士論文、平成二九・三）と山田哲久氏（井上靖『洪水』の典拠と方法、『井上靖研究』第一六号、平成二九・七）の論考である。最後は作者・井上靖の発言である。

昭和期の先行論は「洪水」を高く評価している。例えば、草野心平氏は「洪水」を「壮大な叙事詩」とし、「天然と人間の物凄い闘いのドラマ」と評している。本作の主題に

ついては、「自然と時間」（小松伸六氏）、「自然と歴史」（高橋英夫氏）、「人間の無益な行為の美しさ」（福田宏年氏）など様々な指摘がある。

また、劉淙淙氏と山田氏の論文では、『水経注』、『水経注疏』、ヘルマンの『楼蘭』などの典拠資料を提示し、典拠論の視点から作品を論じている。

本作の典拠に関して、劉淙淙氏と山田氏はいくつかの可能性を示しているが、作品本文と典拠と指摘されている資料とを照らし合わせると、まだ検討の余地があると考えられる。また、先行論では時代設定の理由、生贄の発想、古代の治水思想などの重要な点が論じられていない。

作品の主題について、劉淙淙氏は昭和期の論説と一致する「自然への畏怖」を論じているし、山田氏の論では深く触れられていない。

小説「洪水」は昭和三七年に舞踊劇として上演された。

その際、原作者である井上靖自身は以下の通り述べている。³

舞踊劇「洪水」は、同名の短篇小説をもとにしたもので、舞台も異郷であり、登場人物も異民族である。そして日本がまだ国の形をなさないうつと以前の古代の物語である。上演にいろいろの難点があるのは承知の上で、敢えてこの題材を選んだのは、われわれ現代人が忘れていた大切なものが、この古代説話の中にあると信じたからに他ならない。

井上がここで強調している「われわれ現代人が忘れていた大切なもの」とは、舞踊劇だけではなく、原作「洪水」の主題とも深く関わっていると思われる。では、「われわれ現代人が忘れていた大切なもの」とは何を意味しているのだろうか。

この問題を追求するため、本稿はまず先行論の諸説を整理しながら、出典と指摘されている資料と本文との比較研究を行う。さらに、井上靖の資料の活用方法から、本作品の主題について考察する。

一、典拠の再検討

本作の典拠について、井上靖は以下の通り述べている。

午前中、トランクへ詰めて来た東洋史関係の書物を
抜けて、黄河の流れと闘って洪水を退却させた漢の武
將の故事の典拠を探す。短篇小説の材料である。半年
ほど前どこかで読んだことがあるが、何の書物にかか
れてあったか覚えていない。それに厄介なことに、そ
の話の時代も、漢の時代か、宋の時代かはっきりして
いない。これが判れば、直ぐペンを取りたい気持ちになっ
ているが、判らない限り一字も書くことができない。
(これは数日後、今年大学を出た許りの中央公論社の
春名徹氏を煩わして、『水経注』に載っていることを
調べて貰い、その全文を書き写して貰った)。

(井上靖「作家のノート(十一)」、『新潮』昭和
三四・七)

『水経注』といふ、中国最古の地理書に出てゐるん
です。ほんの二、三行なんです。索勳といふ隊長の
名前もちゃんと出てゐて、洪水と戦つて勝利を収めた、
と書いてあります。」

(山本健吉「井上靖—十二の肖像画(八)」、『群像』昭
和三七・八)

『洪水』は、『敦煌』の「群像」連載「昭和三四・一―五」
が完結した直後、同じ年の七月に雑誌「声」四号に発
表したもので、材を中国の古代地理書『水経注』の「河

水篇』にとつてゐる。敦煌出身の索勸が精誠を以て呼沱の流れをとどめたという短い二、三行の記述があるが、それを中心に据えて、私が自由に作り上げた物語である。索勸なる武人は、その短い記述だけに登場しており、果たして実在の人物であつたかどうか、甚だ疑わしい。そういう点から物語の主人公として登場して貰うには打つてつけの人物であつた。

(井上靖「あとがき」、『井上靖歴史小説集』第一巻、昭和五六・七、岩波書店)

井上の発言の一つ目は、作品の発表時期と重なる。創作ノートのようなものである。作品の成立と最も近い時期の発言であるため、信頼性が非常に高い。二つ目は山本健吉氏が井上に本作の出処について質問したことに対する答えである。これは作者の面接の発言として見ても良いだろう。最後は本作の発表から二〇年以上経つた発言である。恐らく、この時には既に創作当時の記憶があやふやで、作品の舞台であるクム河クムガハという重要な河を「呼沱の流れ」と間違つて書いている。

しかし、第二、第三の発言に『水経注』の「短い二、三行」を参照したという記述がある。山本健吉氏をはじめ、昭和期の研究者たちは井上靖の発言を受け止めて、それ以降、『水経注』が本作の典拠だとし、これが定説になつた。

平成二七年以降、井上靖研究会の学会誌『井上靖研究』

に、劉淙淙氏と山田哲久氏が「洪水」の典拠に関する論文を相次いで発表した。また、劉淙淙氏は平成二九年三月に提出した博士論文でも「洪水」を論じている。氏は井上靖の発言及び山本健吉氏の論に基づいて、「洪水」と『水経注』の比較研究を行っている。

しかし、氏の使つた典拠のテキストは、平凡社が刊行した入矢義高・森鹿三訳『中国古典文学大系』²¹ 洛陽伽藍記・水経注(抄)である。「洪水」の発表は昭和三四年であるため、井上がこのテキストを典拠として用いたとは考えられない。

また、山田氏の論では、本作の典拠を『水経注疏』、「楼蘭」(『文芸春秋』昭和三三・七)の典拠でもあるヘディン「彷徨さまよへる湖」、ヘルマン「楼蘭」に特定している。山田氏の論考における論拠をまとめて以下に示す。

*典拠① 『水経注疏』

井上の発言では、索勸について「実在の人物であつたかどうか、甚だ疑わしい」と述べられている。その発言に対して、『水経注疏』の「疏」の部分では索勸のエピソードが「無可考」(考えられない)、「燕説」(もつともらしいことづけ)とされている。この注釈が井上の発言と一致しているため、山田氏は本作の典拠を『水経注疏』に特定している。

*典拠② ヘーデン『彷徨へる湖』

山田氏の論で挙げられた用例を、左の表にまとめた。

戦いの場面	作品本文	『水経注疏』	『彷徨へる湖』
戦いの場面	戦闘隊形をとって布陣した	×	兵士を戦闘隊形に整列させて……
索勸の目的	軍事植民地	楼蘭屯田起白屋	軍事的植民地を建設するつもりで……
索勸が戦った河	クム河	注濱河	クム川

*典拠③ ヘルマン『楼蘭』

山田氏は、以下の三つの例を挙げ、本作の内容とヘルマン『楼蘭』とを比較している。

地盤の描写	作品本文	ヘルマン『楼蘭』
地盤の描写	固い塩の規制正しく重なり合った層より出来ていて……	大地の下、塩の塊、規則的にたがいに積み重なっている
ギャン・ライ	ギャン・ライという夷狄の名は索勸の初めて耳にするもの	姜頼（これまで知られていなかった名称である）
竜都の位置	敦煌からクム河の河畔への途中	敦煌からこの道を取ると（略）「白い竜の丘」（白竜堆）の地域

では、山田氏の論拠を一つずつ検証する。

典拠①について、井上が『水経注疏』を参照したとする説は慎重に扱うべきではないか。山田氏は上記の一点の例

のみを挙げ、典拠①を提示した。しかし、井上が索勸の実在性を疑った理由はほかにあると考えられる。

索勸と洪水との戦いのエピソードは、『水経注』以外の古文書のどこにも記載されていない。特に漢の時代及びその直後の歴史書には索勸のことは何も記されていない。そもそも索勸という人名も、『水経注』のみに書かれている。そのため、索勸という人物に関する資料収集の際、『水経注』以外の歴史書のどこにも記載されていないかかったことに對して、「実在の人物であったかどうか、甚だ疑わしい」と井上が発言したのは非常に自然なことだと言えるだろう。

典拠②について、論者の観点は山田氏と同じである。しかし、本作の典拠について、井上は『彷徨へる湖』を經由して、『水経注』の原文を参照したと思われる。山田氏の論によると、井上が『楼蘭』を執筆する際に、『彷徨へる湖』の中の「索勸」の「故事」を「読んだ」可能性は高い」という。

ヘーデンの探検記『彷徨へる湖』は昭和一八年四月に日本の東洋史学者・岩村忍氏と矢崎秀雄氏が共同で訳し、筑摩書房より出版された。井上は「さまよえる湖」が岩村忍氏の訳で出版され、それを読んだのは戦争中だった。」と述べている。また、同じ文書に以下の記述もある。

戦時下に「岩村訳『彷徨へる湖』を」手に入れた

後、一誠堂へ頼んでおいて、二冊目のものを「昭和」三十三年に手に入れた。登山家の加藤泰安氏に、ロプ湖の移動を主題にして小説を書かないかとすすめられ急にその気になり、どうしても「さまよえる湖」を読み通してみたからである。

県立神奈川近代文学館に、井上靖生前の蔵書が収蔵されている。その蔵書を調べた結果、昭和一八年版の『彷徨へる湖』が井上の蔵書にあることが確認できた。井上はこの本を刊行後一、二年のうちに読んだと考えられる。さらに、昭和三十三年に「楼蘭」を創作するため、改めて目を通したと推測できる。

先述した本作の典拠に関する作者の発言の一つ目に、「漢の武將の故事」と書かれ、「半年ほど前どこかで読んだことがあるが、何の書物にかかれてあったか覚えていない。」という記述がある。井上がここで指している書物は岩村訳の『彷徨へる湖』だと考えられる。井上には昭和三十三年に「楼蘭」の創作段階で、「漢の武將の故事」を書く構想があったのかもしれない。『水経注』を参照したのは確かであるが、『彷徨へる湖』で索勵のエピソードを知り、それを經由して『水経注』にたどり着いたと考えられる。

また、『彷徨へる湖』における索勵のエピソードは『水経注』に拠っているが、それぞれの本に描かれている索勵の人物像は一致していない。

『水経注』は、中国全土の水路誌『水経』（散逸）に豊富な注を加えて完成した中国の地理書である。この本は、黄河水系に始まり、その流域の都城、古跡及び伝説を記している。以下に見る通り、『水経注』において索勵は、英雄的な人物として描かれている。

敦煌索勵、字彥義、有才略。刺史毛奕表行貳師將軍將酒泉、敦煌兵千人、至樓蘭屯田。起白屋、召鄯善、焉耆、龜茲三國兵各千。橫斷注濱河。河斷之日、水奮勢激、波陵冒堤。勦厲聲曰、王尊建節、河堤不溢。王霸精誠、呼沱不流。水德神明、古今一也。勦躬禱祀、水猶未減。乃列陣被杖、鼓譟謹叫、且刺且射。大戰三日、水乃回減。灌浸沃衍、胡人稱神。大田三年、積粟百萬、威服外國。

一方、『彷徨へる湖』はヘデインの探検記であり、ロプ湖が消えた原因を多くの角度から述べている。索勵のエピソードに言及するのは、古代の人々が灌漑用水を獲得するため、「無理に」河水を引き上げる例を挙げるためである。以下は、『彷徨へる湖』における索勵に関する内容の一部である。

水力を利用し、大量の水を自然の法則ではなく、人間の法則に従はせようとして僅か二、三年前に企てら

れた此の企図は、此の川の歴史上初めての事ではなかつた。多くの河川や水路の事を扱つてゐる古い支那の文献である水経注に、クム河の下流に於ける激しい闘争のことが、即ち堰堤に依つて灌溉用運河に河水を無理に引き上げ、畑作に利用しようとした企図の事がはつきり書いてある。

この文書は敦煌出身の支那將軍索勳について語つてゐる。彼は灌溉技術によつて、今我々がこれから行かうとしてその途上にある地方、樓蘭の民を指揮することゝなつた。紀元二六〇年に彼は、肅州と敦煌出の千人の長として、支那の軍事的植民地を建設するつもりで樓蘭の都に入城した。

索勳は注浜河の河床、所謂南河、即ち下タリムの河口に堰堤を築くために、近隣の地方からさへ人夫を集めた。しかし川が堰き止めらるべきその日に、水は物凄い勢で障壁にぶつかつたので、堰堤は波に壊されてしまつた。

ヘディンは索勳の行為を「自然の法則ではなく、人間の法則に従はせよう」としたと批判的に記している。井上の「洪水」における索勳の人物像は、決して英雄ではなく、明らかに『彷徨へる湖』に描かれている方に近いと考えられる。

また、『水経注』でも『彷徨へる湖』でも、索勳が戦つ

た河は「注浜河」となつてゐる。本作では、その河は「クム河」と描かれてゐる。その改変の理由は『彷徨へる湖』の内容と関連するのかもしれない。

(前略) 四年前アムバンの命令で此の壘壁の下に川を横切つて堰堤が築かれた。何故なら一九二一年に、コンチエ河が旧河床を去つて、クルック即ちクム河の乾いた河床に独りで新しい道を開いたのが丁度此の地点であつたからだ。その乾いた河床を私は一九〇〇年に辿つて行つて地図に描いたのである。一、三年の間に事実上全部の川がクム河の河床に流れ込んでしまつて、以前ティケンリック迄走つてゐた『古い河』コナ河は殆ど乾上つてしまつた。

(中略)

人間の力で自然力の気まぐれの一つを征服し、以てコンチエ河を以前のやうにその旧河床に押し戻し、ティケンリック附近の畑に灌溉する事が出来るだらうといふ空しい考へが懐かれた。四百人の人間がチャルクリック、ティケンリック、ヤンギ・コール、コンチエ、ウルグ・コールから呼び集められ、一番減水した夏に、川を横切つて五百本の堅牢な白楊の杭を二列に並べながら河床に打ち込んだ(中略)つまりその旧河床へ従順に戻らねばならぬだらう。(『彷徨へる湖』第四章)

井上靖は、本作の舞台を、典拠資料にある「楼蘭」ではなく、「クム河の河畔」に設定した。さらに、「注浜河」を「クム河」に設定した。この引用内容にあるエピソードは、本作における索勳のエピソードと共に、人間の力で自然を「征服」する例として挙げられている。ヘディンの記述によると、コンチエ河が何らかの原因で旧河床を去って、クム河の乾いた河床に流れたという。ここで、人間は灌漑のため、四百人の力を合わせ、「川を横切つて」河の流れをコンチエ河の旧河床に戻らせたという。

「注浜河」と他の河との位置関係について、「水経注」には詳しく記されていない。それより、ヘディンのクム河に関する詳細な記述を作品の土台にしたほうがよいと、井上は考えたのではないだろうか。河の規模から見ると、「注浜河」という支流より、主流のクム河の氾濫による洪水が沙漠を「泥海」にするほうがもつと自然なのだろう。

また、「彷徨へる湖」の巻末に西域の地図が載っている。索勳が率いた屯田兵は、敦煌から出発し、龍城を通って鄯善の近くに屯田活動を展開した。このようにすることで、沙漠を「泥海」と化す洪水の凄まじさを表現しようとしたのであろう。

地図と照合すると、その地域はクム河付近だと推測できる。そのため、「彷徨へる湖」（地図を含め）から影響を受け、索勳たちの屯田地をクム河に設定した可能性が高いと見られる。

もう一点の例を挙げると、「白楊」^{ガブラ}が挙げられる。ヘディンの『彷徨へる湖』に、河沿いの白楊を描写する場面が多く見られる。上述の引用にも、人間が五百本の白楊を利用し河の流れを変えたという描写もある。白楊について、本作「洪水」に以下のような内容がある。

（前略）耕地の間を縦横に水路と溝渠は走り、まだそれほど大きくならぬ白楊の木が、水の流れる道を示すように、それらの岸に沿って植えられてあつた。

本作における白楊の描写は、『彷徨へる湖』からの影響を受けたと考えられる。また、「洪水」の初出形と『彷徨へる湖』におけるルビを照合すると、初出形で使われているルビは、ほとんど『彷徨へる湖』のルビと同じだと見られる。例えば、索勳のルビは短篇集「洪水」所収本文では、「サクバイ」となっているが、初出形では「ソウマイ」であり（『彷徨へる湖』と一致する）、これと同じように、クム河は初出形で「クムダリヤ」であり、白楊のルビは「ポブラ」となっている。これらの言葉のルビから見ても、本作が『彷徨へる湖』から影響を受けたことは明らかである。そのため、本作の典拠としては、まずはヘディンの『彷徨へる湖』を挙げるべきである。その次に挙げられるのが「水経注」である。

典拠③について、井上がヘルマンの『楼蘭』を参照した

可能性は否定できないが、そうでない可能性も存在している。まず、山田哲久氏が比較しているのは、井上が手に入れた永田一修訳の『楼蘭』ではなく、松田寿男訳のテキストであるため、考察の客観性は大幅に低下する。また、山田氏は「竜都」の位置、「ギャン・ライ」の由来、「地盤に関する表現」などの面から考察を進め、ヘルマンの『楼蘭』に似ている表現を看取しているが、一方で『水経注疏』には「敦煌」と「竜都」の位置関係は示されていない」と述べている。しかし、『水経注』巻二に以下のような内容がある。

龍城、故姜頼之虛、大國也。蒲昌海溢、盪覆其國、城基尚存而至大。晨發西門、幕達東門、澮其崖岸、餘溜風吹、稍成龍形。西面向海、因名龍城。地廣千里、皆爲鹽而剛堅也。行人所逕、畜産皆布氍毹之、發掘其下、有大鹽、方如巨枕、以次相累、類霧起雲浮、寡見星日、少禽、多鬼怪。西接鄯善、東連三沙。

この内容を見ると、「龍城」「姜頼」と「三沙」（敦煌）の位置関係が分かる。「洪水」の「竜都」、「ギャン・ライ」はこれに由来すると考えられる。本作品の「竜都」に関する描写はこの『水経注』の内容とよく似ている。例えば、「日の出に正門を発すると、日没頃漸く東門に達する」、「旅人たちは自分の連れて来た家畜を寝かせるために、毛氍を敷

かなければならない」といった「洪水」の記述は『水経注』の記述と一致する。

以上の通り、本作の主な典拠を、『彷徨へる湖』と『水経注』に確定するのが妥当だと思われる。それ以外のものについては、慎重に扱う必要があるのではないだろうか。

二、「洪水」における疑問点

次に、先行論で考察されていないいくつかの疑問点について検討する。さらに、それと本作のテーマとの関連を究明したい。

1、猷帝の時代設定―漢の西域経営の末路

物語の空間と時間には作者の創作意図が含まれている。本作の空間について、井上は「玉門関を出て一週間ぐらいの行程の砂漠の中に、小さいオアシスを想定」したと述べている。典拠資料では屯田の目的地は「楼蘭」と示されているが、井上は本作に架空の空間を作り上げた。この点に関して、山田氏は前掲の論で「楼蘭近辺と同定されることを回避しようとする井上の意識がよみとれよう。」と述べている。先述したように、「楼蘭」だけではなく、「注浜河」も意図的に改変された。井上は、本作と小説「楼蘭」及びその空間との間に距離を置き、「楼蘭」から独立した作品とし、独特の「オアシス」を作り上げたのである。

次に、時代の設定について検討する。まず、典拠と本品の設定との相違点を提示する。

作品本文	『水経注』	『彷徨へる湖』
後漢獻帝(紀元一八九—二〇〇年)の末期	不明	紀元二六〇年

この表の通り、本作の時代設定には作者の明確な意図が反映されている。『水経注』巻二「河水」に以下の内容がある。

樓蘭王不恭于漢、元鳳四年、霍光遣平樂監傅介子刺殺之、更立後王。漢又立其前王質子尉屠耆為王、更名其國為鄯善。百官相道橫門、王自請天子曰、身在漢久、恐為前王子所害、國有伊循城、土地肥美、願遣將屯田積粟、令得依威重。遂置田以鎮撫之。

これは索勳の屯田につながる歴史的背景である。新しい樓蘭王・尉屠耆の要請により、漢は屯田兵を伊循城に派遣した。索勳がいた時代は、前漢の「元鳳四年」(西暦前七七年)とは大きく離れているが、屯田の目的は変わらなかった。

『水経注』の記述は『漢書』『西域伝』における、鄯善王・尉屠耆に関する以下の内容と対応していると考えられる。

元鳳四年、大將軍霍光遣平樂監傅介子往刺其王(中略)乃立尉屠耆為王、更名其國為鄯善、為刻印章、賜宮女為夫人、備車騎輜重、丞相率百官送至橫門外、祖而遣之。王自請天子曰、一身在漢久、今歸、單弱、而前王有子在、恐為所殺。國中有伊循城、其地肥美、願漢遣二將屯田積穀、令臣得依其威重。於是漢遣司馬一人、吏士四十人、田伊循以填撫之。其後更置都尉。伊循官置始此矣。

この『漢書』の記述はそのまま小説「樓蘭」に書かれている。

樓蘭の質として長く長安にあった尉屠耆は、漢吏から兄安婦の死を伝えられ、安婦に替わる樓蘭の王となるために、即刻故国へ帰るよう命じられた。

併し、尉屠耆が長安を離れるまでにはなお何日かを要した。

「自分がいま樓蘭へ帰っても、匈奴とその協力者のために直ちに殺されてしまうことは必定である。幸い樓蘭の南部、伊循城のある地方は湖もあり地味も肥沃である。願わくば、そこへ漢兵を派遣して屯田させて戴きたい。そうすれば、漢兵の威力に依って樓蘭国は匈奴の桎梏から逃れてやって行けるかも知れない。それ以外に自分は王として樓蘭国を治めて行く自信はな

以上の内容から判断すると、井上は索勳たちが屯田に行つた時代設定を、何らかの意図を持って「後漢献帝の末期」という時代に設定したと思われる。

恐らく、この設定は漢の西域経略の歴史と関連している。「彷徨へる湖」における「紀元二六〇年」の由来は明確ではないが、ヘディンの著書から、このような人間の行動に対して批判している態度が読み取れる。したがって、ヘディンはこの話の時代を意図的に中国の乱世（三国時代）にし、統治者の無謀な決断を強調したのではないだろうか。

漢の西域経略を題材に、井上は「異域の人」（『群像』昭和二八・七）という短篇小説を創作した。そこで漢と西域の交流や対立を描いている。「元鳳四年」は、屯田が多く行われ、漢が西域諸国を支配する力を持っていた時代である。「献帝の末期」は、漢王朝の末路にあたる時代であり、西域への支配力が弱体化していた。

また、本作に為政者（献帝）の「常套手段」は「朝令暮改」だと描かれ、索勳も「再び漢土に戻って来ようとは思わなかった」という消極的な態度が読み取れる。そのため、本作における「献帝の末期」という時代設定は、「漢室」が「漸く衰亡の一途を辿り、内治に追われている」という時代状況を強調するためであると考えられる。このような時代背

景のもとでは、朝廷からの屯田命令は無謀だと思わざるをえない。井上は時代設定を利用して、西域で「軍事植民地」を建設する行為に対して、批判的な姿勢を示しているのではないか。

2、「生贄」の典拠と役割

井上靖の西域物で、神（水神）を祀る場面は、小説「漆胡樽」（『新潮』昭和二五・四）以来、よく描かれている。例えば、「漆胡樽」では、葡萄酒が入っている漆胡樽を祭壇に供え、「河竜」を祀る。「楼蘭」では、水に関係のある場所でも何回も祭壇を作り、神である「河竜」に祈りを捧げる。さらに、「聖者」（『海』昭和四四・七）では、泉を神として祀り、ある「聖者」と呼ばれている老人がその聚落の水源を守っている。しかし、「生贄」が登場するのは「洪水」のみである。次に「生贄」の定義、典拠及び本作品における役割を検討してみる。

『日本国語大辞典』第二版によれば、「生贄」とは、「生きものを生きたまま神に供える事。また、その供え物。」である。

本作品における「生贄」の典拠として、『水経注』と『大唐西域記』が挙げられる。この二つの典拠資料に、本作と関連する記述が見られる。まずは、『水経注』の一部を用いる。（分かりにくい箇所は、適宜現代日本語訳をつける。）

穆天子傳曰、天子西征、至陽紆之山。河伯馮夷之所
都居、是惟河宗氏。天子乃沈珪璧禮焉。(卷一)

(天子乃ち玉器を黄河に沈めて河伯を祀る。)

淮南子曰、昔禹治洪水、身禱陽紆。(卷一)

(昔禹が洪水を治めた時、身を質として陽紆で祭祀
を行った。)

この通り、『水経注』にはすでに河伯や河神を祀る内容
が記載されている。玉器(珪璧)を河に沈め、河神から国
の管理に役に立つ「河図」をもらったという。禹の話では、
自分の身体を質として、河神に祈禱をしたというが、「生
贄」とは少々異なっていると云わざるをえない。そのため、
本作品における「生贄」の「祭祀」の機能は、『水経注』
における、河神を祀るといふ内容から影響を受けた可能性
があるが、「生贄」とは少し離れている。

次に、もう一つ出典の可能性を検討する。井上は『大唐
西域記』(以下、『西域記』と称す)について、『五世紀の『法
顕伝』や七世紀の玄奘三蔵の著した『大唐西域記』などは
暗記する程に読み返したものです。』と述べている。この
点から、『西域記』は井上の西域物に大きな影響を与えて
いると考えられる。

例えば、「楼蘭」の創作について、井上は「玄奘の『大

唐西域記』で楼蘭という砂漠の国があったことを知り、そ
れを調べる気になりました。」と述べている。また、後期
の西域物である「僧伽羅国縁起」(「心」昭和三八・四)、「羅
刹女国」(「新潮」昭和三八・八)、「聖者」などは『西域記』
の内容に基づいて作られた作品である。

井上の西域物で『西域記』と関連する作品は多く存在し
ているが、両者の比較研究はほぼ見られない。ここで、本
作品における「生贄」と関連する『西域記』の一部を引用
する。

◆『大唐西域記』卷一二「瞿薩旦那國」

城東南百餘里有大河、西北流、國人利之以用溉田。
其後斷流、王深怪異、於是命駕問羅漢僧曰、「大河之
水、國人取給、今忽斷流、其咎安在。爲政有平不、德
有不洽乎。不然、垂譴何重也。」羅漢曰、「大王治國、
政化清和。河水斷流、龍所爲耳。宜速祠求、當復昔
利。」王因回駕、祠祭河龍。忽有一女凌波至曰、「我夫
早喪、主命無從。所以河水絕流、農人失利。王於國內
選一貴臣、配我爲夫、水流如昔。」王曰、「敬聞任所欲
耳。」龍遂目悅國之大臣。王既回駕、謂群下曰、「大臣者、
國之重鎮、農務者、人之命食。國失鎮則危、人絕食則
死。危死之事、何所宜行。」大臣越席跪而對曰、「久已
虛薄、謬當重任。常思報國、未遇其時。今而預選、敢
塞深責。苟利萬姓、何吝一臣。臣者國之佐、人者國之

本、願大王不再思也。幸爲修福、建僧伽藍。」王允所求、功成不日。其臣又請早入龍宮、於是舉國僚庶、鼓樂飲餞。其臣乃衣素服、乘白馬、與王辭訣、敬謝國人。驅馬入河、履水不溺、濟乎中流、麾鞭畫水、水爲中開、自茲沒矣。頃之、白馬浮出、負一旃檀大鼓、封一函書。其書大略曰、「大王不遺細微、謬參神選、願多營福、益國滋臣。以此大鼓、懸城東南、若有寇至、鼓先聲震。」河水遂流、至今利用。歲月浸遠、龍鼓久無。舊懸之處、今仍有鼓。池側伽藍、荒圯無僧。

(現代日本語による概要)

于闐の国人が利用する大河が断流し、国王は某高僧に原因を聞いた。高僧は「これは龍の仕業であり、早めに龍を祀るべきだ。」という。王が河龍を祀ったところ、急に河から一人の龍女が姿を現した。龍女は王に「夫が死んで以来、私はずっと独居している。それなので、指導の主がいず、河水を断流させて、農夫を困らせている。王様にお願ひする。もし領内の貴族大臣を選び、私の夫になってもらえば、河水を元にする。」と告げた。王は国にとって、農業は大事だが、大臣も大事だと群臣に言った。そこで、一人の大臣が自ら王にお願ひし、万民のため竜宮に行くこと述べた。この大臣は白服を着て、白馬に乗って河水の中に入り込んだ。そこで、河水は再び流れた。

この通り、『西域記』の記述には、河神を祀るだけでなく、生贄として国の大臣を竜宮に送り込む話も見られる。

井上が本作品の典拠資料として使った『西域記』の版について、「学生の頃」から読み込んだ点と、神奈川近代文学館「井上靖文庫」に所蔵されている井上の蔵書に残されている点とから考えると、堀謙徳著の『解説西域記』に限定できるのではないかと思われる。堀氏の著書に、「大唐西域記」の原文はもちろん、氏が書いた「解説」及び「考証」も収録されている。そのため、非常に読みやすい『西域記』になっている。

以下、本作の内容と典拠資料の『西域記』とを比較する。『西域記』と本作品の内容を比べると、アシヤ族の女の身分について、対応関係が一層明らかになる。本作では以下のようにある。

(前略) 夜、どこから嗅ぎつけて来たのか、十数人の異様な風体の男女が水売りに来た。アシヤ族の男女であった。

索勸はその中の若い女の一人を呼び寄せ、己が幕舎に泊まらせた。女は逆らわなかった。女の軀は一面に油でも塗ったように光り、肌は魚体のように冷たかった。女は漢人の血を混じえて居り、僅かながら漢語を解した。

アシヤ族は西域の異民族で、素勳の軍中に、「水を売りに来た」という。ここで暗示されているのは、アシヤ族の女は、沙の海で「生」を左右する「水」を持っているということである。また、井上のほかの西域物で、軍人が異民族の女を自分のものにする時、抵抗される事例が多く見られる。例えば、ウイグル王族の女（「敦煌」）、カレ族の女（「狼災記」）、「新潮」昭和三六・八）が挙げられる。一方で、アシヤ族の女は素勳に「逆らわなかった」という。これは『西域記』における「龍女」の行為を連想させる。さらに、アシヤ族の女の肌は「魚体」のように描かれている。龍は想像上の動物であるが、一般的に龍の全身は魚のような鱗に覆われていると想像されている。したがって、アシヤ族の女は、『西域記』の「龍女」に倣って創作されたのではないか。

また、アシヤ族の女は素勳の寝所で、「竜都」のことを詳しく紹介する。

女は素勳の寝所で、この附近一帯の地が曾て竜都と言つて、ギャン・ライの首都であつたところだつたと語つた。（中略）城内の高処に立つて顔を西に向けて湖を望むと、運河は身をくねらせ横たわつてゐる「四」の竜の姿に見えた。（後略）

ここで、アシヤ族の女は素勳に重要な情報、すなわち竜都の繁栄と没落を提供する。竜都の存在とその城邑の滅亡

を聞いた時、素勳は「初めてその女に心を惹かれるのを感じた」という。つまり、素勳がアシヤ族の女に惹かれた理由は、一種の功利主義かもしれない。その一方、素勳は「軍事植民地」の建設を進めるうちに、アシヤ族の女を愛するようになった。

兵たちは合戦を忘れて田作りと城造りに専念した。素勳はずっとアシヤ族の女と同室に起居していた。無口で目立たない女ではあつたが、素勳はその女を愛した。この女に依つて、素勳の胡地に於ける生活はどのくらい慰められたか判らなかつた。素勳の居室だけに色彩があつた。粘土の床には蘆の莖が敷かれ、その上に色あざやかに織りなされた絨毯が敷かれてあつた。土間には水がめが並び、部屋の棚には西方のガラス製の皿や器が並べられた。女は化粧をしていなかったが、美しいもので躰を飾つた。薄い青銅で作つた指輪をはめたり、碧玉の首飾りをかけたり、白い玉の耳環をつけたりした。

本作品の全体を見ると、色彩を表す描写は極めて少ない。ただ、素勳と出会つた二年目のアシヤ族の女に、「色あざやか」「青銅」「碧玉」、「白い玉」などの色彩を帯びている言葉が使われている。屯田地での「色彩」は素勳とアシヤ族の女の愛を象徴している。しかし、故国の「栄達」

のため、素勸は女を裏切った。

「勿論、一緒に連れて行く」

素勸はいつも同じ言葉を吐いた。素勸は本当に女を連れて行くつもりであった。ただ、長く眼にしていないう泉や涼州の町々のたたずまいを頭に思い浮かべると、何となく夷狄の女をその中にしっくりと嵌め込むことのできない気持があった。(後略)

アシヤ族の女は、素勸の心の中で位置が変わる。素勸は女を愛していたが、「栄達」と比べると、女はただの「夷狄」にすぎないと思っている。女を河神に献じた後、素勸は「何か肩の荷が降りたような物とした思いのあるのを覚えた。」という。本作品におけるアシヤ族の女は非常に悲劇的な登場人物だと見られる。それと同時に、女の死によって、主人公の素勸の本性は剥き出しにされた。これは「生贄」が本作品で果たしている役割の一つだと考えられる。

3、洪水伝説に見られる治水思想

中国古代の書物には洪水に関する記録が多く残されている。現代に伝えられている古代の説話は儒家の「怪力乱神を語らず」(「論語」述而篇)の影響を受け、史実化したいわゆる「經典」(四書五経)を通じて保存されている。洪水の伝説について、出石誠彦氏は「上代支那の洪水説話に

ついて」で「歴史時代の洪水の惨害極めて多く、中に黄河より受ける所至大である」と述べ、黄河流域で農耕生活を展開した原始漢民族は洪水の惨害に悩まされ、「極めて幼稚な説話」の形で洪水の恐れるべきことを語り継ぎ、やがてそれが帝王の治水説話として知識ある人々の間に重視され、禹の功績として上代記録に主要なる位置を占めるに至ったと論じている。

中国古代の洪水伝説を、松本信廣氏は「禹の治水伝説」、「臺駘伝説」、「女媧伝説」、「共工伝説」、「蚩尤伝説」、「混沌伝説」の六つに分けている。

その中で、「禹の治水伝説」は最古の伝説であり、多くの書籍に記されている。以下、井上が西域物を書くにあたって参照した資料、市村瓊次郎氏の『東洋史統』の内容を引用する。

孟子にも亦禹の治水のことを記して

當堯之時、水逆行、氾濫於中國、蛇龍居之、民無所定、下者爲巢、上者爲窟、書曰：洪水警余、涇水者洪水也、使禹治之、禹掘地而注之海、驅蛇龍而放之、道、水由地中行、江、淮、河、漢是也、險阻既遠、鳥獸之害人者消、然後人得平而居之。

市村氏の著作には『孟子』における禹の治水の話だけで

なく、『詩経』、『書経』、『墨子』などの関連する記述も引用されている。また、井上の蔵書、出石誠彦氏の『支那上代思想史研究』（福村出版、昭和一八・九）にも、中国古代の洪水伝説が詳しく紹介されている。

井上は川に特別な感情を持っている作家である。その中で、『崑崙の玉』（『オール読物』昭和四二・七）という黄河の源に関する小説がある。また、『四角な船』（初出、『読売新聞』昭和四五・九・一六〜四六・五・一六）という、ノアの方舟伝説を背景に、洪水到来の前にハコ船を建造しようとする物語がある。ノアの方舟伝説は、西洋の洪水説話である。それに対して、井上の「洪水」は中国の古代伝説から着想を得たものだと考えられる。

黄河氾濫に関わる洪水伝説や古代の治水伝説は多くの資料に記されているが、その資料の一つが本作品の創作と直接に関連している『水経注』である。

ここで注目すべき点は、古代の治水方法である。洪水に対して、堤防によって治めるのではなく、排水によって治めたのが、禹の治水方法である。禹の父である鯀は堤防で治水をしたが、失敗した。

厳密に言えば、本作「洪水」は治水に関するものではなく、「屯田」の名目で河水を利用する物語だと言える。『水経注』には河の流れと戦う原因は記録されていないが、『彷徨へる湖』には眼の前の利益のため、「無理に」河道を変えようとする、人間の不適切な行動でロブ湖附近の環境が

大きく変わったという内容が書かれている。

本作では洪水が起る原因について、明記されていない。しかし、典拠の『彷徨へる湖』に記述されている内容は、その原因にあたるかも知れない。四百人の労働者たちは、「五百本の堅牢な白楊」を河床に打ち込み、さらに「土や草や根や枝や屑石」でその隙間を埋めた。それと同時に、高い岸に四本の通路を掘った。河が増水すると、白楊の障壁にあたり、「出口を探さねばならない」という。その人間の行動が招いた結果は以下の通りである。

（前略）然しすべては空しかった。水は杭の間に滴り、やがて埋めた物を洗ひ去つた。そして秋季の増水が来た時には全堰堤が一扫され、杭の大きな塊はマッチの軸のやうに一方の側に抛り出された。

ヘーデンは、人間の行動が招いた「洪水」を描いている。このような人間の行動について、ヘーデンは批判的姿勢を示している。

そのため、井上は禹の治水伝説から人間と自然の調和という重要な教示を得たのではないか。また、それを本作のテーマとし、人間と自然が戦う物語を創作した。本作における索勸は、「軍事植民地」を建設するため、西域に入った。中国の歴史上、特に漢代における辺境の屯田に関する記述は多く見られるが、井上の作品における索勸の行動及び運

命は、少し特別な存在だと見られる。索勸の狂騰する水に對する行動は、彼の運命を決める。

三、西域經營と自然破壊

小説「川の話」(『世界』昭和三〇・七)には、井上の見た多くの川が描かれている。この小説の後半は天竜川に関する話である。主人公の「私」は、大学時代の級友に誘われ、天竜川ダム工事を見に行く。「私」はダム工事に関心を持っていなかったが、天竜川を遡って行くという道筋に心惹かれていた。

天竜川の旅で、「私」は川を遡って、多くの風景を見た。特に、湖の底に沈む前の無人村(竜山村)を訪れ、「特別な感慨しか私の心には湧いてきませんでした。」という。これらの経験は、井上の西域物の創作に影響を与えたと考えられる。

「洪水」は山本健吉氏によれば井上の「空想」で創作された作品だというのが、本作における堤防建設は井上の実体験と関連があるのかもしれない。以下、「川の話」における天竜川のダム工事に関する内容を引用する。

(前略)それからかなり長い間、来年はダムの湖底に沈んでしまうという部落を走りました。満開の花を着けた桜樹がまたちらほら路傍に見え出しましたが、こ

の桜樹も来年は湖底に沈んでしまうわけで、いま彼等は無心に最後の花を着けているのだと思うと、桜樹を点綴した風景というものが、私の眼には妙に空虚な明るさで映ったものです。

天竜川は、過去においてよく氾濫した川である。昭和三〇年代の佐久間ダムの建設は多くの人々の注目を集める。井上が訪れた時は、佐久間ダムの工事中であった。佐久間ダムの建設は昭和三一年に完成した。戦後建設された最初の大規模発電用ダムだと言われている。「私」は水没する前の湖底を見て、「怒りに近い感情」を抱く。自然の川を愛している「私」にとって、天竜川のダム工事は何千人という人間が必死になって自然の破壊作業に従事しているにほかならない。

ヘディングの『彷徨へる湖』に書かれている索勸の話では、「堰堤」が波に壊され洪水が起こったという。それに対して、「洪水」では「堰堤」に関する記述が見られない。井上は作品に、屯田兵たちの「軍事植民地」の建設を詳しく描いている。特に、屯田兵は「クム河の水を引いて、それを灌漑用水として耕地を作った。」と描かれている。歴史研究者の李楠氏の研究によると、中国古代の屯田という制度は、漢代に作られたという。漢の中央政府の西域經營に必要な軍糧を確保するため、行なわれた制度である。

本作の典拠資料の『水経注』には、漢の武帝の時代だけ

でも、七つの屯田区が作られたという記録が残されている。しかし、『水経注』も『漢書』も、漢の屯田制度を中国の立場（匈奴と戦う軍隊や商隊の安全を守るため、軍隊の食糧を確保するためなどの理由）から評価している。特に、先に引用した『水経注』と『漢書』における「尉屠耆」のエピソードでは、鄯善の国王に就任する前、尉屠耆が漢に屯田兵の派遣を要請したという。しかし、井上は本作品における屯田兵を新たな角度から描いた。さらに、屯田兵の行動と大洪水の発生とを結びつけた。

屯田兵たちのクム河の流れを変えた行為と、新しい「軍事植民地」の建設によって、長官の索勳は母国への帰還がかない、それに伴い、栄達が約束された。索勳たちはクム河畔で兵舎の建造と城壁の構築に取りかかった。さらに、屯田の三年目の夏、小麦粉と粟はそれぞれ「百万石の収穫量を持った」。立派な兵舎と城壁、四方に拡がっている耕地は屯田兵たちの功績でもある一方、自然（クム河）の破壊につながってしまっている。

また、索勳が栄達のため、「愛していた」アシヤ族の女を河神に捧げた行為も、彼の利己的な人間性を表現している。この女は索勳に「竜都」を紹介した時、ある重要な言葉に言及している。それは「運河」（人工的に造った河）である。

先に「竜都」に関する典拠資料（『水経注』）を示したが、典拠ではギャン・ライ（姜頼）の河に関する記述は見られ

ない。しかし、井上は創作で、一匹の竜の姿のような「運河」が、「竜都」の滅亡と関わっていることを、アシヤ族の女の口を通して、索勳に知らせた。「竜都」の運命を暗示する「運河」という言葉は、索勳への警告とも言えよう。これも重要な伏線として、索勳たちが造った「軍事植民地」の運命を暗示している。

屯田兵が畑作りのため、灌漑用水路を造り、河から水を引くのは一般的なやり方であるが、本作ではこのような作業に批判的な立場が取られていると考えられる。

本作品の最初に索勳たちの屯田の行為は無謀だと暗示している。さらに、アシヤ族の女の死によって、索勳の利己的な本性が明らかにされた。本作では、索勳たちの屯田の正当性や必要性が疑われている。結局、屯田兵たちと彼らが造った「軍事植民地」とは洪水に飲み込まれ、母国で約束された「栄達」も河に流され、泥海の底に沈んだ。

索勳が率いた屯田兵がクム河の水を引いて、兵舎や城壁を作る行為は、まさに天竜川のダム工事と同じように、人間の便利を追求するために、自然を破壊することを意味している。井上靖が語っていた「われわれ現代人が忘れていく大切なもの」とは、過剰な自然開発より、自然に尊敬の念を抱き、自然を保護することを優先すべきだということではないだろうか。

「洪水」の創作を通して、井上は自然の力を表現しながら、人間の自然破壊に対して抗議しているのではないだろ

うか。「洪水」のテーマの一つとして、現代の自然開発への批判を読み取れるのではないか。

おわりに

人間と自然の調和については、既に「楼蘭」の段階で描かれている。漢と匈奴の争いに巻き込まれたため、楼蘭と自然（ロプ湖）の共存の環境は破壊された。楼蘭古国を破壊に導いた根源は、生を象徴する水・河である。沙漠にある河（川）に依存する人間にとって、自然との均衡の崩壊は、一瞬にして死を招いてしまう。井上は「楼蘭」で、楼蘭国の盛衰を語りながら、人間と自然の共存の重要性を語っている。さらに、「楼蘭」の末尾にヘーデンの調査結果を利用し、ロプ湖の復活、及び「河竜」の回帰という願望を述べている。

井上靖は、「洪水」の空間と時間を、意図的に小説「楼蘭」と距離を置いて設定しているが、両作品の関連も見られる。「楼蘭」が楼蘭古国の盛衰を究明する作品だとすれば、「洪水」はロプ湖と関わる西域の河の断流の原因を究明する作品だと言えよう。両作品はいずれもヘーデンの「彷徨へる湖」から大きな影響を受けた。そのため、「洪水」は「楼蘭」の延長線上にある作品だと見られる。

井上は「洪水」で、新たな視点から屯田を描き、典拠における索勸の洪水との戦いに大きく創作を加え、無謀な自

然開発（屯田）によって命も「栄達」も洪水に飲み込まれる物語を作った。人間の行為が招いた大洪水を描きながら、「われわれ現代人が忘れていた大切なもの」、すなわち自然を尊重するという基本理念を忘れてはいけないということを強調している。

【注】

(1) 昭和期の先行研究としては、①山本健吉「西域物によせる情熱―『洪水』」(『読売新聞』昭和三七・五・二四)、②山本健吉「井上靖 十二の肖像画(八)」(『群像』昭和三七・八)、③小松伸六「自然による滅亡の記録」(『図書新聞』昭和三七・五・一九)、④草野心平「東洋的エビクター―『洪水』」(『日本読書新聞』昭和三七・五・二八)、⑤高橋英夫「解説」(『洪水・異域の人』旺文社、昭和四六・八)、⑥福田宏年「解説」(『井上靖自選集』集英社、昭和四〇・七)などが挙げられる。

(2) 作者自身の発言には以下の二篇がある。①井上靖「作家のノート(十一)」(『新潮』昭和三四・七)、②井上靖「あとがき」(『井上靖歴史小説集』第一巻、岩波書店、昭和五六・七)

(3) 井上靖「『洪水』上演について」は、昭和三七・四・一―二五、新橋演舞場で開催の第四〇回春の

東をどりパンフレットに発表されたものである。

- (4) 筆者は平成二九年五月に日本近代文学会春季大会（於東京外国語大学）で口頭発表した「井上靖「西域物」における水・河―「楼蘭」と「洪水」で、本作と昭和一八年版『彷徨へる湖』の比較を通して、両者の酷似性を示した。
- (5) 井上靖「さまよえる湖」について（『世界ノンフィクション全集Ⅰ』付録、筑摩書房、昭和三五・四）
- (6) 井上靖、河上徹太郎「井上文学の周辺」（『対談・日本の文学』中央公論社、昭和三九・一一）
- (7) 井上靖「限りなき西域への夢」（『週刊読書人』昭和五二・一〇・一〇）
- (8) 井上靖、篠田一士、辻邦生『わが文学の軌跡』（中央公論社、昭和五二・四）
- (9) 堀謙徳『解説西域記』（前川文栄閣、大正元・一一）
- (10) 出石誠彦『支那神話伝説の研究』（中央公論社、昭和一一・一一）
- (11) 松本信廣「中国洪水伝説の諸相」（『史学』巻二三第三号、昭和二三・六）
- (12) 市村瓊次郎『東洋史統』（富山房、昭和一四・一一）。井上靖「西域物」の初期作品の本文と対照し、また井上蔵書を調べた結果、市村氏の著書を参照したと推定できる。拙稿「井上靖「漆胡樽」論―「西域物」の源泉―」（『現代社会文化研究』第六三号、平成

二八・一一）参照。

- (13) 日本文科学会編『佐久間タム』（東京大学出版会、昭和三三・三）における「地域社会に及ぼした影響」を参照した。また、筆者は「朝日新聞データベース」を利用し、昭和三〇・一―昭和三四・七までの新聞記事を調べた。その結果、四二件の記事が看取された。
- (14) (13)に同じ。
- (15) 李楠「両漢西域屯田組織管理体系」（『農業考古』二〇一七・一）

* 作品本文の引用は以下の通りである。「洪水」（『井上靖全集』第六巻、新潮社、平成七・一〇）、『水経注』（北京文學古籍刊行社、昭和三〇・四）による。引用部の傍線、現代語訳及び（略）は、筆者による。

【付記】

本稿は、日本近代文学会春季大会（二〇一七・五・二七、於東京外国語大学）及び第五回東アジア語文社会国際シンポジウム（二〇一七・一一・二四、於台湾高雄大学）の口頭発表をもとに加筆・修正を行ったものである。会場内外で有益なご教示を賜った方々に厚く御礼申し上げます。

（新潟大学大学院現代社会文化研究科 博士後期課程）